

久留米市埋蔵文化財調査集報 (II)

内 畑 古 墳

久留米市文化財調査報告書

第52集

1987

久留米市教育委員会

UCHI

HATA

内 畑 古 墳



序

耳納山地の北麓草野町一帯は、市内でも有数の埋蔵文化財包蔵地域であります。

おびたしい古墳群が点在し、著名な下馬場古墳・前畑古墳をはじめとする個性豊かな装飾古墳などは、祖先の息吹きを今日に伝える貴重な文化遺産です。

今回の調査は、そのうちの一つ内畑古墳の発掘調査の報告であります。

本書が文化財愛護の理解普及のため、また、学校教育の教材・学術研究の一資料として、各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

発刊にあたり、調査にご協力いただきました地権者の方に衷心より謝意を表する次第であります。

昭和62年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 光山利雄

例言

1. 本書は、専用住宅建設に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 写真は、遺構・遺物とも萩原裕房が担当した。
3. 掲載の図面は、実測及び製図について萩原が行ない、一部、櫻井康治・平塚あけみの協力を得た。
4. 本報告は、執筆・編集とも萩原が担当した。

本文目次

I はじめに

II 古墳の調査

1) 石 室

2) 遺物出土状態

3) 遺 物

① 装身具

② 武器・工具・馬具類

③ 須恵器

III おわりに

IV 昭和61年度発掘調査



第1図 遺跡分布図 (1/50,000)

I は じ め に

内畑古墳は、耳納連山の北麓、久留米市草野町字内畑792-1に所在する。当該古墳は、古いころから知られており、県遺跡分布地図（遺跡番号030215）にも記載され、個人の庭の築山として利用されていた。この山麓部は、耳納連山が開析され多くの扇状地が形成された内の1つで、装飾古墳を含む古墳密集地帯として著名である。しかし、多くの古墳は農業用地造成時に破壊を受け、ごく一部が辛うじて現存するに過ぎない。内畑古墳も、石室は完全なものであったが、墳丘の3/4は削り取られている。

近在する古墳には、前畑古墳・下馬場古墳の装飾古墳が知られ、吉木古墳群を形成している。両古墳とも副室構造を有し、石室は長方形プランを呈している。下馬場古墳は、直径約30m、高さ約5mの墳丘規模で、比較的外形が良く残っている(第1図)。

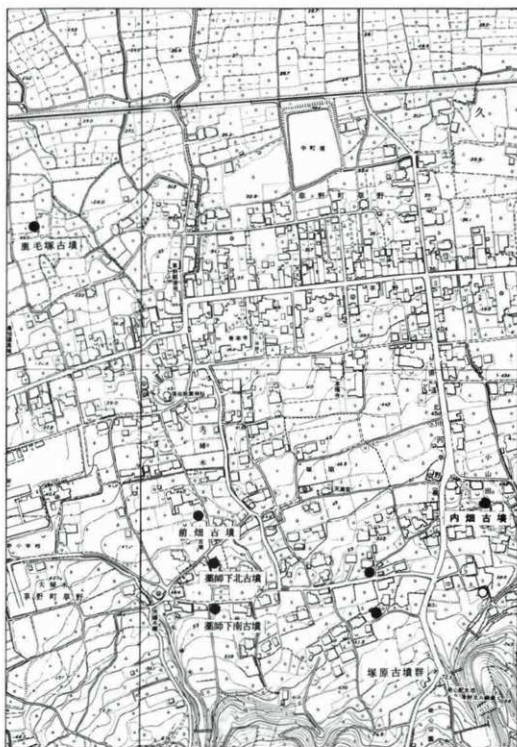
さて、今回、個人の宅地造成に伴って、確認調査を昭和61年1月10日～同年1月14日まで実施した。その結果、周溝の一部を検出したが、建物による周溝への影響もなく、協議の上、古墳自体は現状のまま築山として保存する事で話し合いがつき、住宅建設は実施された。

さらに、昭和61年8月4日から、庭園の表土入れ替えに伴ない、石室の前庭部（ほとんど羨道部だった）の発掘調査及び石室の実測を実施した。石室の内部には、以前祠を祭っていたと思われ、土砂・砂利等が多く、除去作業に多くの時間を奪われ困難をきわめたが、昭和62年9月24日調査を完了した。

土地所有者の[]氏ははじめ関係各位、ならびに作業に従事された方々の協力により調査を終了することができた。ここに記して感謝の意を表します。



石室入口全景（南西より）

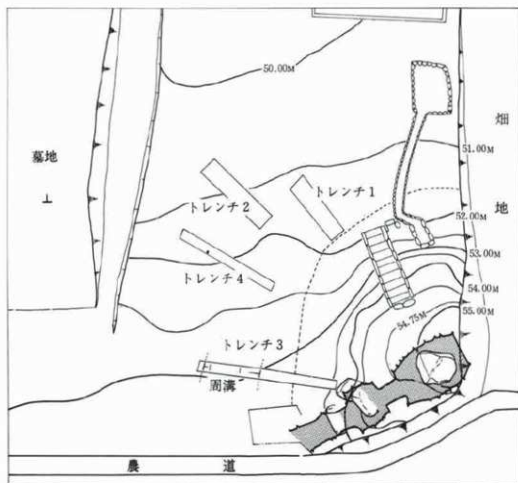


第2図 内畑古墳周辺地形図 (1/5,000)

II 古墳の調査

古墳は、標高52m上に営まれており（第2図）、墳丘の東側は、畑地のため削平され現存しない。また、南側の墳丘は一部カットされ農道及び宅地となり、墳丘1/4遺存するにすぎない（第3図）。墳丘上部には、祠が建っていたが、以前石室内にあったものと思われる。

本墳は、現状のまま保存されることとなったため墳丘の調査は行なわなかった。現存高は、約3mを測る。設定したトレンチ1・2・4では、墳丘の盛土や周溝等はすでに削られ検出できなかった。しかし、トレンチ3（第3図）において、幅約3mの周溝を検出した。現地表からの深さは、約95cmを測るが、底部から厚さ約40cm程に黒褐色土の自然埋土があり、これが本来の周溝の遺存と考えられる。また、墳丘から周溝までゆるやかな傾斜を持つが、墳丘築造時の地山整形の跡ではないかと思われる。見かけの墳径は16mだが、石室の玄室を中心として墳



第3図 内畑古墳墳丘測量図（1/200）

丘を復原すると、径約20m～25mの墳丘になる。

また、前庭部にあたると思われる所を掘り下げたところ、埋め立てられた羨道部が表われ、前庭部や墓道は敷地外の農道に延びる。埋め立ては、地表下1.5mにも及び、現在、石室の入口として利用されていたのは、副室と羨道部の境の天井部であった。石室は古くから開口しており、玄室右壁袖石脇には、炉を築いたと思われる石組があり、すり鉢・土鍋等の遺物も出土している。中世のある時期、人が生活していた様子が窺える。

1) 石 室

内部主体は、主軸をN-59°5'50"-Eにとり、南西に開口する全長10.6m以上の複室式横穴式石室で、前室・後室ともに胴張りを有するプランであるが、割石小口積による構築ではない(第4図)。

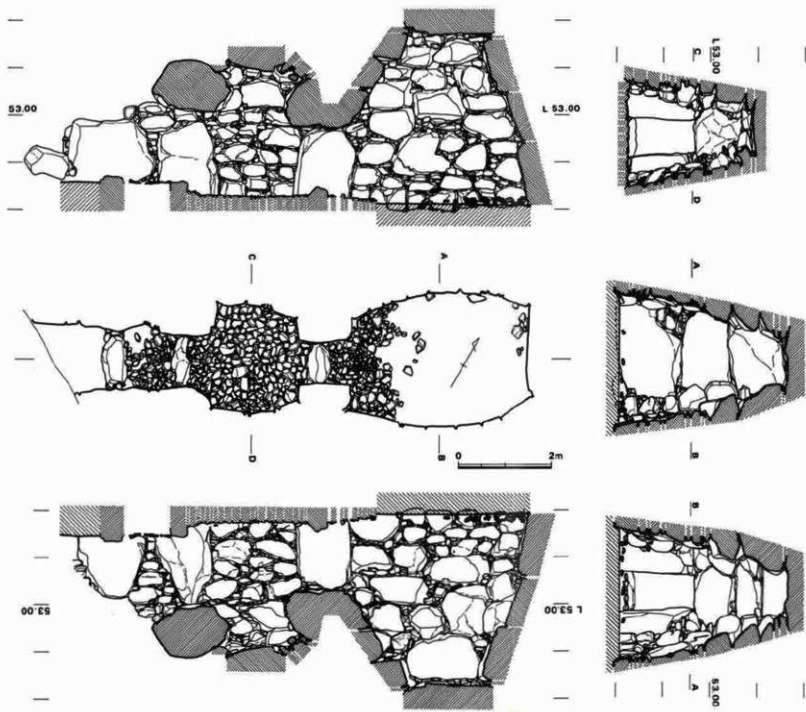
石室は、羨道部の一部が破壊されている他は、すべて完全であった。後室・前室ともに河原石を用いた数石が一面に施されていたものであるが、後室の奥壁部の一部は調査時点に除去してしまった。

後室の平面形は、所謂「三味線胴」と云われる胴張りの石室を呈している。

規模は、



後室より羨道をのぞむ



第4図 内畑古墳石室実測図 (1/80)

奥壁 部 幅	1 m90cm
袖 石 部 幅	1 m88cm
仕切り石までの主軸長	4 m20cm (玄門端までは3.75m)
玄 門 幅	85cm
玄 門 長	1 m15cm

を測る。奥壁は腰石として高さ1.3mの石材を1個用い、上方には高さ1mの石材1個を横長に用いて2段目とし、さらに上方に3段積として高さ1.25mの石材1個を充てている。ほぼ同等の高さの石材3段で奥壁は構成され、1段目と2段目境の左側一部に30cm台の石で空間となる部分を埋めている。奥壁は、約13度内外で内傾させる。玄門上部には、奥壁と同じく1段目を高さ90cm、2段目を高さ60cmの石材を横長に用い、3段目には55cmの石材を充て、最上部には天井石を据えるための小石を詰めている。3段ともに約31度の傾斜で、奥壁よりかなり内傾させる。左側壁は、2段目までは、20cm～30cm程の自然石を約10度内傾させ据え、上方には比較的大きな石(50cm～60cm)を6段積みしている。内傾度は、15度である。右側壁は、玄門より



石室石組 (後室玄門横)

に50cm大の石を1段据えるが、奥壁側には、20cm～30cm大の石を3段据え、上方2.6m程は4段積みにし空間を造る。内傾度は、14度で、左右ともほぼ同じ傾きを示している。後室中央部の床面幅は、2.8mであるのに比し、この部分の天井部の幅は1mとほぼ1/3の幅となっている。天井石は1枚の大石でふさぐ。床面から天井部までの高さは、3.45mを測り、一段目の石材は20cm程床面下に埋められていた。また、左・右壁とも、2段目までの石は玄門より奥壁に向かって僅かに傾斜しており、このことは、玄門から随時据えていったことが窺える。

前室も同じく胴張りの石室を

有し、規模は、

玄門部側幅	1 m70cm
羨門部側幅	2 m15cm
羨 門 幅	1 m
仕切り石ま での主軸長	2 m30cm (玄門端から羨門端までは1 m75cm)
中央部幅	2 m20cm

を測る。左側壁は、50cm前後の石材を3個程最下段に置き、上方に50cm～1 m大の石を6段積みする。傾斜は、10度程を測る。右側壁は、50cm前後の石材を1段～2段積みして最下段を造り、上方に、左側壁と同じ規模の石材を15度程内傾させて6～7段積みする。袖石は、左1.2m、右1.15mの長さで、高さ1.5～1.8mの柱状の石材である。

仕切り石は、後室・前室とも袖石のほぼ中央部に置かれ、後室のそれは長さ80cm、高さ約30cm、前室のそれは長さ105cm、高さ25cmの長方形を呈するものである。

確認した羨道部は、左側壁2.7m・右側壁1.6mを測るが、まだ調査区外に延びる。幅は、袖石部で1.2m、確認端部で1.5mと開口部近くがやや幅広くなっている。左側壁には、ほぼ垂直に幅1.8m、高さ1.2mの長方形の石材を腰石に置き、右側壁には、幅1.4m、高さ1.5mの三角形の石材をほぼ垂直に腰石とし、空間を大小の石材で造っている。

羨道部の上部は現存していないが、腰石の第1石上部に天井石があったものと考えられる。それは、左側壁の石室寄第1石は大きな石材を用いているが、第2石は幅1m、高さ50cmの石材を腰石としている点。また、第1石材の裏込めの石に長さ1 m強、高さ50cmほどの石2枚を使用して補強している点。さらに、羨道部の床面は前室の床面より30cm程高く造られてはいるが、第1石中央部に後・前室の仕切り石と同じ石材で仕切られ、前室仕切り石との間に敷石が施されている点などから、この羨道部の第1石材の上部までは確実に天井石が置かれていたのではないかと考えられる。羨道部の仕切り石の長さは1.5m、高さ20cm程を測る。

敷石は、後室・前室・羨道部の一部とも施されているが前室と後室の敷石では、10cmほどの高低差を持つ。



敷石（前室）

2) 遺物出土状態

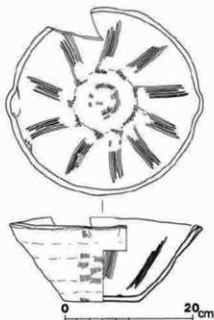
出土遺物は、トレンチ 2・3・4 では数点の須恵器が出土しているが、主に石室からの出土で、特に須恵器は羨道部前方部埋土中からの出土がほとんどであった。

後室内には、奥壁の腰石石材が完全に埋没するほど砂利・土砂等が搬入され除去するのに苦労させられたが、敷石を有する石室であることがわかった。右壁袖石隅には、中世と思われる石組(炉か?)があり、土器類(第5図)が検出された。

古墳時代の遺物として後室・前室・羨道とそれぞれ出土しているが、後室からは僅かで、ガラス小玉・勾玉・高杯脚部それぞれ各1点ずつであった。高杯脚部は、床面より浮いた状態の出土であったが、玉類は左壁袖石隅の敷石間からの検出であった。前室からは、鉄器類(兵車鎖・鎖・飾金具・耳環等)のみの出土で、左壁袖石隅の敷石直上からの検出(第6図)であった。須恵器は、ほとんど羨道部出土で杯蓋・身、高杯、提瓶、平瓶口縁、甕頸などがあった。また、中世の土師器類、さらに江戸～明治にかけての日常雑器も出土した。



遺物出土状態(前室)



第5図 後室出土すり鉢実測図(1/6)





第6図 前室遺物出土状態実測図 (1/40)

を測る。環の断面は楕円形を呈し、長径6mm、短径4mmを測り、かなり扁平である。2は、長径18mm、短径16mmと1とまったく同じで、断面形態も同一であり、対になるものと考えられる。前室出土である。重量は、1が4.5g、2が5.38gで、1がやや重い。

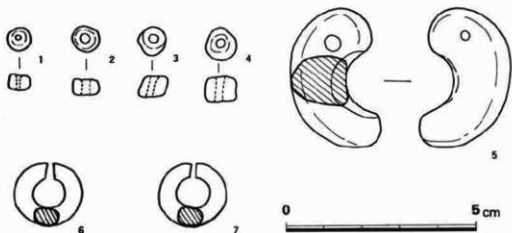
3) 遺物

① 装身具 (第7図)

小玉 (1～4) ガラス製の小玉である。色調は、ルリ色で濃・淡がある。1は直径6mmで厚さ3.5mm・重量0.15g、2は直径8mm・厚さ4mm・重量0.22g、3は直径7mm・厚さ5mm、重量0.3g、4は直径8mm・厚さ6.5mm・重量0.5gで、すべて片方からの穿孔である。

勾玉 (5) 長さ36mmの硬玉製の勾玉で、後室出土である。厚さ約13mm・重量17.5gを測る。断面の背は丸味をおび内側はやや平坦部を持つ。穿孔は、片方から孔径4mm～2.5mmである。後室出土である。

耳環 (6・7) 2個とも金環であり、遺存状態は非常に悪く、僅かに金環と知れる程度である。1は長径18mm、短径16mm



第7図 装身具実測図 (1/1)

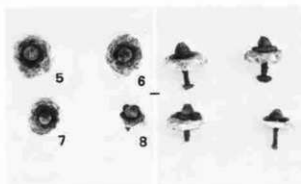
② 武器・工具・馬具類 (第8図～第10図)

鏃 (1～29) 前室のみの出土で、全部で23本以上を数える。1は、^{有茎片刃箭式}に属する。全長12.9cm、茎長5.5cm、最大幅3.8cmを測る。2～29は、^{有茎片刃箭式}に属し、長い^{篋被ぎ}を有する。各鏃の計測値は、表1のとおりである。11・12・19～23は刃部のみ、24～29は^{篋被ぎ}及び茎の破片であるが、^{有茎片刃箭式}のものと思われる。

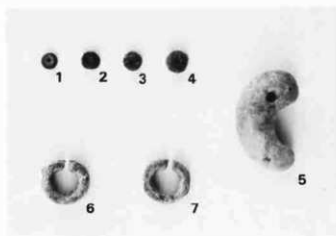


刀子

刀子 (1～3) 大・中・小の3本の出土である。1・2は、茎の一部は欠損しているが、ほぼ完形に近いものである。1・3は茎に木質部の遺存が見られる。1は残長9.7cm、刃部長7.4cm・最大幅1.4cmを測り、保存状態は良好である。断面は二等辺三角形でやや厚味を有する。2は、残長12.7cm、



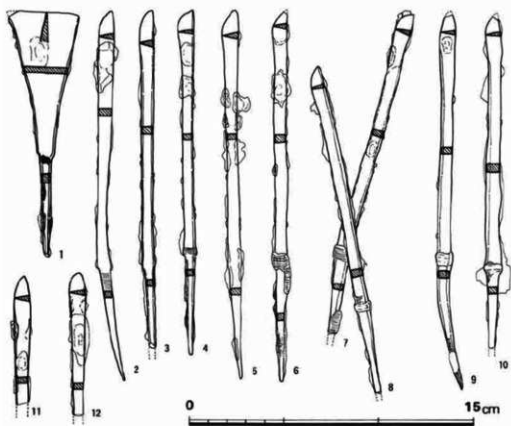
鏃金具



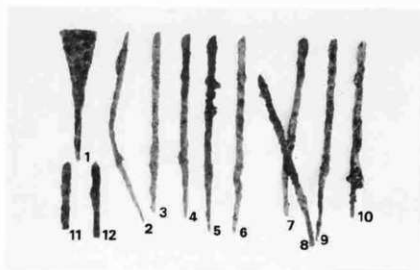
装身具



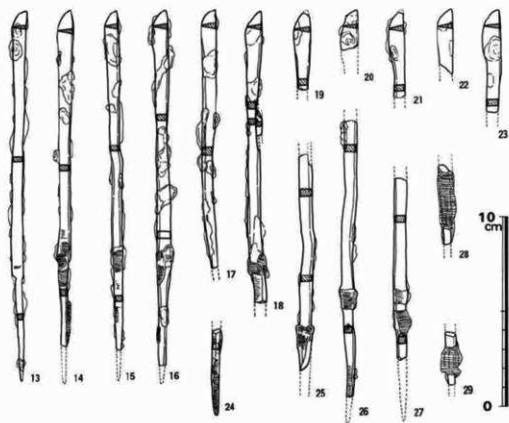
留金具・不明鉄器



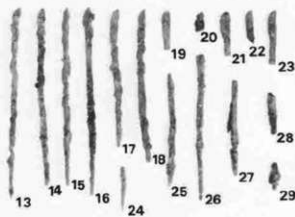
第8图 铁器实测图① (1/2)



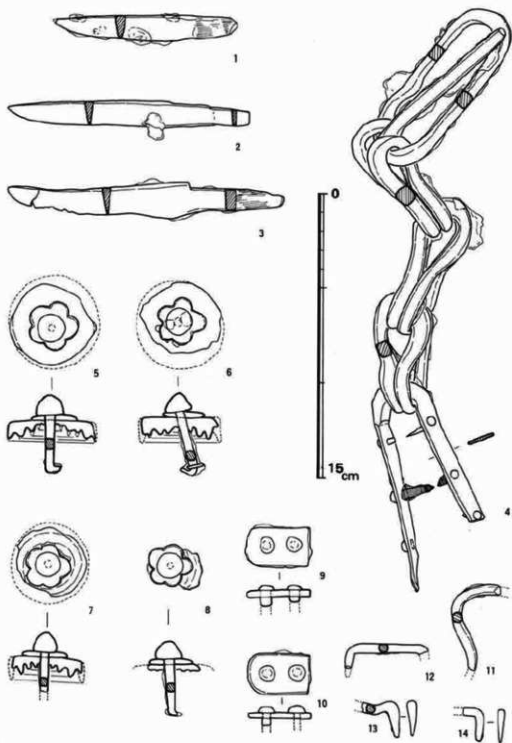
铁器①



第9図 鉄鍔実測図②(1/2)

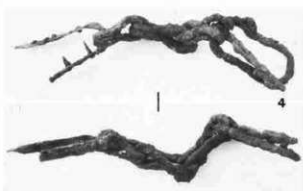


鉄 鍔 ②



第10図 銅金具・工具・馬具類実測図 (1/2)

刃部長10.6cm、最大幅1.3cmを測る。刃部の中央部がやや凹状になっている。茎の幅は、0.9cm、厚さ0.3cmである。3は関を有し、1・2とは異なり明確に刃部と茎を区別する。刃部長は9cmを測り、断面は薄目の二等辺三角形を呈する。茎は、1.2cm、厚さ0.5cmを測る。刃先端部には刃こぼれ状の刻があり、また刃部は内湾気味でありかなり使いこなした様子が窺える。



馬具

馬具（4） 馬具と思われるものは、図示した1点のみであった。木心鉄張壺鍔と思われるものに兵庫鎖及び鍔鉤を受ける鉤具が付く一連のものである。鍔本体は遺存せず、兵庫鎖を受ける鍔上の金具しか現存しない。金具の高さは、11.2cm、幅1.3cmを測り、それぞれに3個の鉤を有し、木目が明瞭に付着している。兵庫鎖は3連で、1単位は径約9mmの鉄棒を曲げたもので、7cm前後の長さを有する。鉤具は、径約8mmの鉄棒を用い全長9.5cm、最大幅3.4cmを形づくる。刺金は、その一端を底辺の横棒に折り曲げて留めている。この一連のものとセットになる兵庫鎖や鍔等は出土しなかった。

飾金具（5～8） いずれも前室出土である。4点とも貝製品の本体中央部に孔を明け、鉤を打ち込んだものである。鉤には5弁の花紋様を呈した鉄地金胴張りの台座がつく。鉤頭部はわずかに平坦面をなす。5・6の鉤端は、L字に曲げられている。8はわずかに貝製品が遺存する。貝製品の径は、5・6・7それぞれ4.8cm、4.6cm、4.1cmで、厚さは1.1cm～1.4cmである。鉤全長は4～4.5cmを測る。

留金具（9・10） 前室出土で、2個ともほぼ同じ大きさである。幅は、2.1cmと2.2cm、長さ3.4cmと3.2cmである。短辺の一边を円頭形にしたもので、2個の鉤が打ちつけてある。鉄地金胴張りの品と思われるが、詳細は不明である。

用途不明鉄器（11～14） 11はS字状のもので、直径5mmの鉄棒を用いている。12～14は、同じ形態のものと思われ、かすがい状を呈すると考えられる。折り曲げられた部分は、断面三角形に尖らしている。

表-1 鉄 鍬 計 測 一 覧

(単位 cm)

番号	a 身長	刃部長 b	幅 C	刃端長 d	幅 e	身長 f	番号	a 身長	刃部長 b	幅 c	刃端長 d	幅 e	身長 f
1	12.9	—	3.8	—	—	5.3	16	$(18.6)+a$	1.7	0.9	11.7	0.6	$(5.2)+a$
2	19.4	1.5	0.8	12	0.7	6.0	17	$(13.6)+a$	1.3	0.8	11.6	0.6	$(0.7)+a$
3	$(17.7)+a$	1.7	0.8	11.7	0.6	$(4.3)+a$	18	$(15.3)+a$	1.2	0.8	12.4	0.5	$(1.8)+a$
4	18.1	1.5	0.8	11.4	0.55	5.2	19	$(4.2)+a$	1.8	0.9	$(2.3)+a$	0.55	—
5	19.3	1.2	0.7	12.4	0.6	5.8	20	—	—	—	—	—	—
6	19.5	1.6	0.8	11.9	0.6	6.0	21	$(4.6)+a$	2.2	0.8	$(2.4)+a$	—	—
7	$(17.4)+a$	1.0	0.9	12.4	0.6	$(3.9)+a$	22	$(3.4)+a$	1.1	0.8	—	—	—
8	$(11.2)+a$	1.1	0.7	11.8	0.55	$(4.7)+a$	23	$(5.4)+a$	2.5	0.9	$(2.9)+a$	0.6	—
9	19.9	1.5	0.8	11.4	0.65	7.2	24	$a+(4.5)$	—	—	—	—	—
10	$(17.3)+a$	1.4	0.8	11.9	0.65	$(4.2)+a$	25	$(11.4)+a$	—	—	$(9.2)+a$	0.7	$(2.0)+a$
11	$(6.8)+a$	1.1	0.8	$(5.6)+a$	0.5	—	26	$(14.5)+a$	—	—	$(9.1)+a$	0.55	$(5.2)+a$
12	$(7.5)+a$	1.2	0.85	$(6.3)+a$	0.6	—	27	$(9.5)+a$	—	—	$(6.5)+a$	0.6	$(3.0)+a$
13	19.4	1.4	0.9	12.5	0.5	5.5	28	$(4.2)+a$	—	—	—	—	—
14	$(17.7)+a$	1.6	0.8	11.4	0.65	$(4.6)+a$	29	$(2.8)+a$	—	—	—	—	—
15	$(17.8)+a$	1.4	0.7	11.2	0.5	$(5.2)+a$							



各計測点

注1 後藤守一「上古時代鉄鍬の年代研究」『人類学雑誌』第54巻4号昭和14年による。氏は大きく縁を持つものと持たないものとに区別する。その中で、片刃箭式は有茎片刃箭式と棘鍬被片刃箭式として分類され、有茎片刃箭式は4類に細分されている。その中でも、内畑古墳出土の鍬は、有茎片刃箭式に含まれる。

有茎片刃箭式

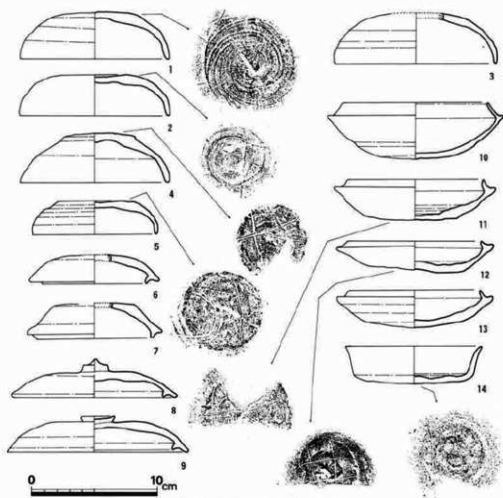
- 類銅鍬片刃箭式
- 鍬被片刃箭式
- 長身片刃箭式

棘鍬被片刃箭式

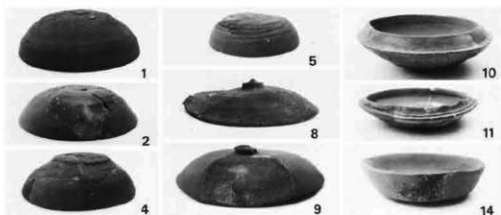
- 棘鍬被片闊片刃箭式
- 棘鍬被闊片刃箭式
- 棘鍬被闊片片刃箭式
- 棘鍬端片刃箭式

③ 須恵器 (第11図～第12図)

杯蓋 (1～9) 大きく2大別できる。いわゆる身受けの返りをもつもの (6～9) と、もたないもの (1～5) である。身受けの返りをもつものの中で、つまみを持つものと (8・9) もたないもの (6・7) とがある。前者は、返りが口縁部の中に入り、後者は外に出る。3の最大径は、12.8cm・器高4.1cmを測り、天井部と口縁部にかけての明瞭な境を有せず、口縁先端は丸くおさめられ、内側に段を持たない。器肉は薄手である。1・2・4・5の最大径は9.9～11.8cm前後、器高2.7～3.9cmと3と比べひとまわり小さいタイプである。特に、5は小さい。口縁端は丸くおさめられ、内側に段を有さない。器肉は、厚手である。1・2は、天井部から



第11図 須恵器実測図 ① (1/3)



須恵器 ①

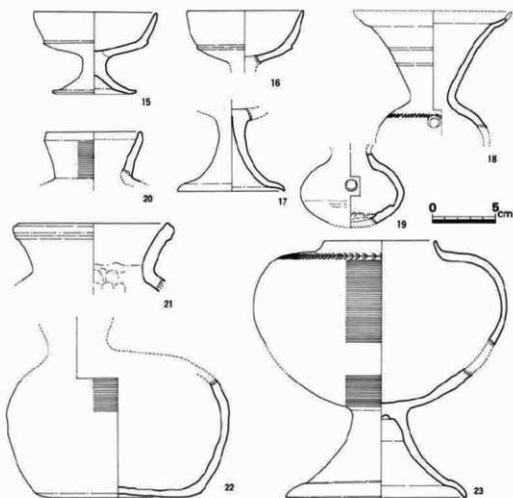
2/3ほどヘラケズリを施こしている。4・5は、ヘラ切り離した後わずかにナデ調整している。6・7の最大径は10.4cm・10.8cm、器高2.3cm・2.9cmを測る。8・9の最大径は、13.2cm・14.5cm、器高3cm・2.8cmを測る。擬宝珠つまみを持つが、9の中央部はへこんでいる。天井部はヘラケズリで、体部内外はヨコナデで仕上げている。ヘラ記号は、1・2・4・5・7にみられ、2本～4本のヘラ描き沈線である。色調は、6・8が暗茶褐色、他は暗青灰色を呈する。

杯身 (10～14) 大きく2大別できる。蓋受けの返りをもつものと、もたないものがあり、さらに大きさにより細別される。10は、蓋受けの返りが高く、最大径14cm、口縁径11.5cm、器高4.5cmを測る。胴部は丸味を持ち、返りとも薄手である。返りは、1.4cmを測りかなり内傾して立ち上がっている。先端部は段を持たないが、わずかな平坦面を有す。外面底部から1/2はヘラケズリ、体部内外はヨコナデを施し、底部内面は丁寧なナデ調整で仕上げている。11～13は、最大径12.4cm～12.8cm、器高2.3cm～3.2cmと、10よりひとまわり小さいタイプである。器肉はやや厚手で、返りの立ち上がりは0.6cm～0.9cmと低く内湾しながら立ちあがる。底部外面の1/2～1/3ほどヘラケズリを施しているが、11のみヘラ切り離して終っている。14は、返しを持たないタイプで、口径12.8cm、器高3cmを測る。胎土には、かなりの砂利が混り不良である。体部は、外湾しながら外傾し、ヨコナデを施こしている。底部はヘラ切り離しである。ヘラ記号は、10以外に見られ、2本～4本のヘラ描き沈線である。色調は、青灰色～黒灰色で、焼成は良好である。

高杯 (15～17) 16は杯部のみ、17は脚部のみの資料である。3点とも小形の高杯である。15の杯部口径は9.8cm、高さ3.5cmを測り、脚の高さは3cm、径6.8cmと低くて小さい。杯の体部の中位に段を有し、口縁部は外方に立ち上がる。底部から有段までヘラケズリが施され、他はナデ調整である。脚部先端はかるく返ね上げ、杯との接合部は厚く柱状を呈する。16の口径は9.2cm、器高4cmの杯部で、15よりやや下方に段を持つ。15よりやや丸味をおび、底部から有段までヘラケズリ後カキ目跡もみられる。17は、径8.6cm、器高6.5cmの脚で、15の脚部とは異なり、細長い。先端部も丸味を持たせ、返ね上げない。色調は、黒灰色を呈し、焼成・胎土とも良好である。

觥 (18・19) 18は、体部を欠損する資料である。口縁部はラッパ状に開き、口径12.6cmを測る。口縁部中位には、2本の沈線が施され、口縁端は外湾させよくらませている。器肉は薄手である。体部上方に径1cm程の穿孔を施し、櫛刺突文が1条めぐる。19は、体部の破片資料である。胴部最大径は8.2cmで、底内面は、6mm角の棒状による押圧痕が残る。底部から中位までヘラケズリ、中位から頸部にかけては、縦方向のケズリが施されている。18・19とも小形品である。

提瓶 (20・21) 口縁部の破片である。20は口径7.6cmを測り、口縁部は外傾しているが、端部は直立させ丸くおさめている。外面はカキ目調整されている。色調は黒灰色を呈する。21は



第12図 須恵器実測図② (1/3)



須恵器②

復原口径11.6cmと大きいタイプである。口縁端部は肥厚し、ヨコナデで2条の段を形成している。内外面ともナデ調整し、頸部は指圧痕が残る。色調は黒褐色を呈する。

平瓶 (22) 肩部から口縁部を欠損した資料である。おそらく、平瓶になるものと思われる。底部外面は、回転ケズリ、胴部はケズリが施され胴部中位上方はカキ目が残る。底部内面は、指圧痕があり、体部内面はヨコナデ調整である。色調は青灰色を呈する。

脚付短頸壺 (23) 脚部と体部の接点はないが、同一のものと思われる。復原口径8.8cm、器高13.4cmの壺に、径14.4cm、高さ7cmの脚が付く形態である。口縁部は、内傾させ約0.8cm立ち上っている。胴部最大径は、胴部中位上方にあり、20.2cmを測る。肩部には、真中にわずかな沈線施した羽状文を付している。底部内側には弧状のタキ痕を有する。外面胴部はカキ目調整している。脚部先端は、17の高杯の脚部と同じように内湾させている。ヨコナデ調整で、丁寧なつくりである。

III おわりに

内畑古墳について若干のまとめを行ない、結びとしたい。

築造時期については、出土須恵器から大略6世紀後半に比定され、これは他の遺物の示す年代観とも矛盾しない。

前室からは、武器・馬具・装身具の出土があり、その狭小なる空間からも副葬品を置くスペースとしての色彩が強いが、1対の耳環の出土状態は、遺体埋葬の可能性も考えられる。

須恵器の出土は羨道部前面からの出土が主で、後室出土の須恵器1点は、その出土状態から考えると、後世に逆に持ちこまれたのではないと思われる。そうなると、石室内には1点の須恵器も供献されていないこととなり、こうしたあり方は、筑後地域の1つの特徴となるのだろうか。今後の検討が必要であろう。また、出土須恵器の蓋杯・杯は、Ⅲb形式に比定できるものの、他にⅣ～Ⅴ形式に含まれるものもあり、追葬のあったことを物語っている。

石室について、仮に後・前室各側壁の弧の半径を求めると、

後室 L ₁ (右) 半径 4.04m	前室 L ₃ (右) 半径 2.3m
L ₂ (左) 半径 4.18m	L ₄ (左) 半径 2.6m

となり、両室とも右壁の張り具合が強いことがわかる。この左右異なる半径値が、石室のゆがみに起因するのか不明であるが、本石室構築に先立ち、なんらかの設計・設計法が存在したことは当然想定されるが、作図法の内容についてはまだこれから問題であろう。

さて、複室を有する古墳は、耳納北麓に数多く所在することはすでに周知のことである。久留米地域では、吉木古墳群・塚畑古墳群等が知られるが、現在まで本格的な調査は実施されていず、実体は不明である。だが、知られる古墳の石室プランを見た場合、長方形プランの複室石室を有するものが多く、今回明らかになった自然石を利用した三味線銅張を有する古墳はみ

あたらない。しかし、田主丸地域では、益永古墳群・益生田古墳群⁸¹A群などの調査で、内畑古墳の石室構造と同じ形態のものが所在する。さらに古墳築造も、ほとんど同時期で構成される古墳群の中でも、長方形プランと三味線胴張りプランを有する古墳の混在が認められる。こうしたことを考慮すると、草野の古墳群の中でも調査が進めば益生田古墳群と同じ様な実態が明らかとなろう。また、久留米南部（八女地方に近い地域）では、胴張プランを持つ後期古墳群（中隈山古墳群⁸²・極楽寺古墳群等）が知られるが、すべて割石小口積の石室であり、草野古墳群との石材の違いを示す。異なる石室プランの混在や、石材の違いなどが古墳群編成の中で、どのような意味を持つのか、今後の問題である。この様に、筑後地方の後期～終末古墳を解明するには、益々草野古墳群の調査が望まれるところである。

注1 『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第1集 1984. 3. 31

2 『中隈山古墳群』久留米市文化財調査報告書第8集 1974. 3. 31

IV 昭和61年度発掘調査

昭和61年度は、重要遺跡として国府・国分寺跡8ヶ所、東部地区遺跡として7ヶ所、安武地区遺跡として6ヶ所、他に緊急調査として7ヶ所の調査を実施した。今年度は、新たに、安武地区の圃場整備及び導水管事業関係に伴う発掘調査が加わった。限られた調査員で、多大な調査面積の安武地区遺跡群に対応するには、かなりの重労働となったが、各位の協力を得て無事終了することができた。以下、昭和61年度発掘調査一覧表を記載したので参照されたい。

表一 昭和61年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

遺跡名	調査地	調査面積	調査期間	備 考	
国府跡	第68次調査	久留米市東合川町字上	141-1	86.4.19 ~ 86.5.7	久留米市文化財調査報告書第51集
	第69次調査	久留米市御井町字朝妻	1408-1	86.4.21 ~ 86.6.30	
	第70次調査	久留米市御井町字朝妻	1330-8	86.7.21 ~ 86.8.12	
	第71次調査	久留米市合川町字立石	292-1他	86.7.30 ~ 86.8.23	
	第72次調査	久留米市御井町字三丁野	1453-13	86.8.18 ~ 86.9.24	
	第73次調査	久留米市東合川町字上	149-2	86.9.29 ~ 86.11.17	
第67-2次調査	久留米市合川町字南	1154-1他	86.3.26 ~ 87.1.6		
国分寺跡	第28次調査	久留米市国分町字宮ノ脇	743-15	86.7.21 ~ 86.7.22	
東部地区 遺跡	神道9次調査	久留米市御井町字住吉	1304-3他	86.5.19 ~ 86.6.7	久留米市文化財調査報告書第50集
	野口3次調査	久留米市山川町	2801	86.4.24 ~ 86.6.2	
	野口4次調査	久留米市第225号保留地	51-1	86.5.21 ~ 86.6.2	
	へボノ木20次調査	久留米市東合川町	1055-2	86.6.4 ~ 86.8.30	
	へボノ木21次調査	久留米市	88	86.6.9 ~ 86.9.11	
	へボノ木22次調査	久留米市第284-5号保留地	426-1	86.8.18 ~ 86.10.22	
へボノ木23次調査	久留米市第288号保留地	235-1	86.3.18 ~ 86.10.22		
安武地区 遺跡	庄屋野A区調査	久留米市安武町字庄屋野	2817他	86.7.22 ~ 86.11.6	導水管関係 園地整備関係 園地整備関係 園地整備関係
	庄屋野B区調査	久留米市字	2840他	86.9.29 ~ 86.12.6	
	庄屋野C区調査	久留米市字	2819-1他	86.12.5 ~ 87.2.28	
	女堀A区調査	久留米市字女堀	2423	86.10.22 ~ 86.11.8	
	女堀B区調査	久留米市字	2398他	87.1.18 ~ 87.2.28	
	衛生面連絡調査	久留米市字	2564他	86.10.21 ~ 86.12.26	
池田遺跡 内堀古墳 二本太遺跡6次調査 二本太遺跡7次調査 石丸遺跡 清山遺跡 御家古墳	池田遺跡	久留米市高良内町字池田	7-1	86.4.14 ~ 86.7.2	久留米市文化財調査報告書第52集
	内堀古墳	久留米市東野町字内堀	792-1	86.8.4 ~ 86.9.24	
	二本太遺跡6次調査	久留米市御井町字北井川	639-2	86.10.27 ~ 86.12.22	
	二本太遺跡7次調査	久留米市御井町字北井川	637	86.10.27 ~ 86.12.22	
	石丸遺跡	久留米市東堀込町字石丸	1342	86.11.20 ~ 86.11.22	
	清山遺跡	久留米市上津町字池田	1320-38	87.1.12 ~ 87.2.21	
御家古墳	久留米市大津町字宮本	391-1	86.11.14 ~ 86.12.23	史跡整備に伴う調査	

内 畑 古 墳

昭和62年3月31日

発 行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-5

印 刷 旭プリント社
久留米市櫛原町128-1